

世界で一番賢い人の末路

〔聖書〕 列王記上11章1～13節

ソロモン王はファラオの娘のほかにもモアブ人、アンモン人、エドム人、シドン人、ヘト人など多くの外国の女を愛した。これらの諸国の民については、主がかつてイスラエルの人々に、「あなたたちは彼らの中に入って行ってはならない。彼らをあなたたちの中に入れてはならない。彼らは必ずあなたたちの心を迷わせ、彼らの神々に向かわせる」と仰せになったが、ソロモンは彼女たちを愛してそのとりことなった。

彼には妻たち、すなわち七百人の王妃と三百人の側室がいた。この妻たちが彼の心を迷わせた。ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。ソロモンは、シドン人の女神アシュトレト、アンモン人の憎むべき神ミルコムに従った。ソロモンは主の目に悪とされることを行い、父ダビデのように主に従い通さなかった。そのころ、ソロモンは、モアブ人の憎むべき神ケモシュのために、エルサレムの東の山に聖なる高台を築いた。アンモン人の憎むべき神モレクのためにもそうした。また、外国生まれの妻たちすべてのためにも同様に行ったので、彼女らは、自分たちの神々に香をたき、いけにえをささげた。

ソロモンの心は迷い、イスラエルの神、主から離れたので、主は彼に対してお怒りになった。主は二度も彼に現れ、他の神々に従ってはならないと戒められたが、ソロモンは主の戒めを守らなかった。そこで、主は仰せになった。「あなたがこのようにふるまい、わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから王国を裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す。あなたが生きている間は父ダビデのゆえにそうしないでおくが、あなたの息子の時代にはその手から王国を裂いて取り上げる。ただし、王国全部を裂いて取り上げることはしない。わが僕ダビデのゆえに、わたしが選んだ都エルサレムのゆえに、あなたの息子に一つの部族を与える。」

〔序〕 王制を認めた神の条件

エジプトから脱出して、約束の地カナンに定住するようになったイスラエルの民は人種の異なる周囲の部族と、利害の対立から戦争に巻き込まれることが増えてきました。ペリシテとの戦いで神の箱まで奪われてしまう大敗北をこうむった民は、他の国と同じように、軍隊を持ち、戦争になったら陣頭に立って戦い、勝利をもたらしてくれる王を強く求めるようになりました。

神さまはこの歴史の流れをお認めになりました。問題は新しく立てられる王の支配が、神の支配に沿うものになるのか、打ち壊すものになるのかです。神さまの支配は人間を罪の奴隷から解放していくものです。しかし王の支配は本質的に人間を自分の奴隷にしていく動きを内にもっています。神の支配と王の支配とは鋭い緊張関係にあるということを知覚して、歴史の流れに対応していくことが、課題となってきました。神さまは祭司サムエルを通じてこう語られました。「主はあなたたちに王をお与えになる。だからあなたたちは主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の命令に背かず、あなたたちも、あなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならばそれでよい」(サムエル記上 12:13～14)。

こうしてサウルが王として立てられました。しかし20年後にペリシテとの戦いでサウルも皇子ヨナタンも共に戦死してしまい、ダビデが二代目の王になりました。彼は最初ユダ族だけの王でしたが、やがて全イスラエルの王となり、都をエルサレムに定めました。彼は軍事力を強化して近隣諸国を

支配下に治め、揺るぎない王国を作り上げました。

信仰心の篤いダビデは粗末な幕屋に安置されている神の箱のために、立派な神殿を建設しようと思いました。神さまは、戦いに明け暮れたダビデには神殿建設をお許しになりませんでした。ダビデは我が子ソロモンにその夢を託し、神殿建設の準備を入念に整えて死んでいきました。若いソロモンが大国エジプト国王の娘を王妃とし迎えて、エジプト王の婿になったことは、ダビデ王国の強大さを示すものでしょう。

[1] ソロモンの祈りと主の答

こうして偉大な王ダビデの後を継いで即位したソロモンは、先ず焼き尽くす献げ物一千頭を献げて神さまに祈りました。「わたしは取るに足らぬ若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。——どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。そうでなければ、この数多いあなたの民を裁くことが、誰にできましょう」(3:7～9)。

神さまは謙遜なソロモンの祈りを大変お喜びになりました。そして、もし父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守り、わたしの道を歩むなら、他に並ぶ者のない知恵に満ちた賢明な心ばかりでなく、富も栄光も長寿をも恵もうと約束してくださいました。

ソロモンはダビデの代から友好的だったティルス王からレバノン杉をふんだんに提供してもらい、父ダビデが準備しておいた資材を用い、神さまから授かった知恵を絞って神殿建設に取り組み、7年かけて完成しました。更に宮殿や中央官庁の庁舎、外国からの使節を接待する建物等を13年かけて完成させました。

神殿完成式に当ってのソロモンの祈りも素晴らしいものでした。「神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。この所に向かって僕がささげる祈りを聞き届けてください。僕とあなたの民イスラエルがこの所に向かって祈り求める願いを聞き届けてください。どうか、あなたのお住まいである天にいまして耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください」(8:27～30)。

神さまはソロモンにこうお答えになりました。「わたしはあなたが建てたこの神殿を聖別し、そこにわたしの名をとこしえに置く。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる。もしあなたが、父ダビデが歩んだように、無垢な心で正しくわたしの前を歩み、わたしがあなたに命じたことをことごとく行い、掟と法を守るなら、あなたの父ダビデに、『イスラエルの王座につく者が断たれることはない』と約束したとおり、わたしはイスラエルを支配するあなたの王座をとこしえに存続させる。

もしあなたたちとその子孫がわたしに背を向けて離れ去り、わたしが授けた戒めと掟を守らず、他の神々のもとに行き去って仕え、それにひれ伏すなら、わたしは与えた土地からイスラエルを断ち、わたしの名のために聖別した神殿もわたしの前から捨て去る。こうしてイスラエルは諸国民の中で物笑い嘲りの的となる」(9:3～7)。

[2] ソロモンの栄華

神さまから授かった非常に豊かな知恵と洞察力と海辺の砂浜のような広い心によって、ソロモンの名声は世界中に広まり、世界の王侯のもとから、その知恵に耳を傾ける人々が集まってきました。アラビヤ南部で栄えるシェバの国の女王もその代表的な一人でした。彼女は大勢のお供を従え、非常に多くの高価な贈り物をらくだに積んでエルサレムを訪れました。

彼女はあらかじめ考えておいた質問をソロモンに浴びせましたが、彼はそのすべてに解答を与えました。宮殿のきらびやかさといい、料理のすべて、家臣給仕たちの装いや振る舞いの素晴らしさに、女王は息も止まる思いをしました。

「あなたのお知恵と富はうわさをはるかに超えています。あなたの臣民は何と幸せなことでしょう。」
「あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです」

このようにして、彼の知恵を聞くために集まる人々の貢物や貿易などの利益が莫大になり、ソロモンは世界中の王の中で最も大いなる富と知恵を有するに至りました。彼はエルサレムの城壁を堅固にし、重要拠点に要塞を築き、戦車隊や騎兵隊の駐屯地や補給基地を設け、戦車、軍馬を買い集めて、国内の軍備強化も怠りませんでした。更に近隣諸国の王室から妻を迎えることで姻戚関係を広げて、平和友好の維持に努めたようです。ですから王妃が 700 人、側室が 300 人と数に達したのでしょうか。

しかしこのようなソロモンの類まれなる知恵から生まれた政策は、根本的に神の掟と戒めに違反するものでした。律法には、王の守るべき規定が明記されています。「1 軍馬を増やさない 2 大勢の妻をめとらない 3 銀や金を大量に蓄えない 4 律法の写しを生きながら繰り返して読む(申命記 17:16～18)。ソロモン王のしていることは、明らかにこの全てに反しています。

彼が 20 才の若さでイスラエルの王になった時、偉大な父と比べて、全ての点で未熟でした。自信がありません。ですから必死に祈ったのです。すると神さまは「もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら」という条件付きで、祝福を与える約束をしてくださったのでした。

20 数年経ちました。ソロモンは 40 才半ばの壮年になっていました。神殿・宮殿建設の大事業をやり遂げることが出来ました。しかし果たしてこの神殿を神さまが受け入れてくださるでしょうか。彼は

身も心も低くして祈りました。すると神さまは「もしあなたが、父ダビデが歩んだように、無垢な心で正しくわたしの前を歩み、わたしがあなたに命じたことを、ことごとく行い、掟と法を守るなら」という条件付きで、王座をとこしえに存続させると、約束してくださったのでした。

そうです。そもそも神さまが王制を認められた条件は、「王も民も神さまの御心に聞き従うならば」でした。どんな人をも大切にし、罪に滅びないように守り導こうとされる神の言葉に聞き従うことが疎かにされる時、国を守るとか、国民を幸せにするといっても、人は滅んでしまうからです。

シェバの女王はソロモンが、神さまから授かった知恵を用いて神の公平と正義を行うと思って讚美しました。しかし知恵を用いることによって、それが実現されないのです。公平と正義は神の御言葉に聞き従うことによるのみ行われていくからです。ソロモンにはその自覚がはっきりしていませんでした。

ソロモンは妻たちのそれぞれの勝手な要求を、聞き従うべき言葉とするようになりました。真に聞き従うべき神の戒めを聞かなくなっていきました。そして息子の代に国は分裂して、小国に転落してしまいました。世界の人々を驚嘆させ富と栄華をもたらしたソロモンの知恵が、何と空しいものだったことでしょうか。

[結] 今日に生きる

年若くして王に即位した時、また20年の歳月をかけて大事業を完成させた時の身も心も低くしての謙遜な祈り、あのような素晴らしい祈りを捧げることが出来たソロモンが、どうして真の神さまの戒めから離れてしまったのでしょうか。

モーセは神の民として生きるために守るべき戒め、律法を神さまから授かって民に取り次いだ神の人です。彼の告別説教(申命記)の中では、「今日」という言葉が41回以上も繰り返し使われています。「イスラエルよ、静かにして聞きなさい。あなたは今日、あなたに神、主の民とされた。あなたの神、主の御声に聞き従い、今日わたしが命じる戒めと掟を行わなければならない」(申命記 27:9～10)。

今日、今日、今日——ここから今日の大切さが響いてきます。「青年期のあるときに一度」ではありません。一度良い決心をしたから、それで済むのではないのです。ソロモンは即位した20才ごろの時、素晴らしい祈りを捧げることが出来ました。そして20年後にも、身も心も低くして、素晴らしい祈りを捧げました。

しかし老境に入って「わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから王国を切り裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す」(11:11)と言われてしまいました。昨日素晴らしい祈りをしても、今日祈らずに、欲に溺れて不正に走ったら、昨日の祈りは死に絶えるのです。

ソロモンは、豊かな知恵を働かせて人並み以上のことが出来たので、今日の祈りを疎かにして、日々を過ぎてしまったのではないのでしょうか。「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは力を得、かつ増える」(申命記 30:15)。

毎日、毎日を命と幸いを選ぶ今日として、生きていきたいものです。日曜日の礼拝を私の今日として、大切にいたしましょう。水曜日の祈祷会をわたしの今日として大切に致しましょう。世界で一番賢いと称賛されたソロモンの末路を繰り返さないようにしたいものです。

完